本研究を終えて及び今後に向けて

わたしたちは，平成２年度から４年間「かかわり合いの豊かな子供を育てる教育課程の編成」という研究主題のもと，指導計画の作成及び実践研究を進めてきた。指導計画の作成及び実践研究の推進は相互に欠くことのできないものであり，関連させながら進めていかなければならないと考えるが，この４年間の研究を振り返り分かったこと，感じたこと，今後に向けて考えていきたいことなどを述べてみたい。

今回の研究を進めていく際において，わたしたちは「かかわり合いの豊かな子供を育てる」という同じ方向に目を向けながら，教育課程の編成に取り組んできた。学校の中で教育活動を営んでいく際においては，よく系統性，一貫性のある教育の必要性，またそのための教育課程の編成ということが言われるが，わたしたちが，教育課程を編成していく際において，目指す子供像を設定しそれを念頭に置きながら進めていったことは意義があったと考える。

ところで，わたしたちは，かかわり合いの豊かな子供を育てるために「自我」を育てることが大切であると考えた。自我という言葉は，“自我が未熟だ”“自我をたくましく”といったことで耳にすることはあるが，自我とは何か，自我が子供たちの成長，発達にどのように寄与していくのかといったことにはなかなか目は向けられていなかった。今回の学習指導要領の改訂の中に心豊かな人間の育成が必要だと述べてあるが，そのこととも関連性があると言える自我に目を向け子供たちの成長，発達を見るとともに指導計画の作成及び実践研究を進めてきた。

具体的には，教育課程編成の留意点を導き出し，それを基に指導内容の選択・組織をしながら各領域・教科ごとに指導計画の作成をした。各領域・教科ごと基本的な考え方や，目標，学習活動及び留意点等に教育課程の編成の留意点をできる限り具現化するよう努めてきた。それらも研究の過程での足跡と言えるであろうし本研究の成果として評価したい。また，今回新たに「なかま」という指導の形態を設けてみた。最近，学校において，異年齢集団における活動が重視される面がある。本校においても「なかま」の時間を設定し小学部から高等部までの異年齢集団を構成し共通の様々な活動を通して，相互理解や協力し合う態度，地域との交流などを培っていった。「なかま」での実践を振り返るとき，次のような子供たちの姿をかいま見ることがある。

- 全員で一緒になって一つの物を作り上げている子供たちの姿
- 友達同士で話し合ったり，助け合ったりしている子供たちの姿
- 地域への奉仕活動をしたり，地域の人との交流を深めたりしている子供たちの姿

その姿は，自分で「やってみよう」という気持ちを持ちながら，いろいろな活動に伸び伸びと取り組んだり，お互いのことを認め合い分かり合いながら活動に取り組んだりしている子供たちの姿である。また，「なかま」での実践が休み時間でのかかわり合いへも発展しており，子供たち同士楽しそうに遊んだり助け合ったりする場面が増えつつある。そういった子供たちの姿を見るとき，自我関与，自己の意識化が促されつつあり「なかま」を新たに設定したことは，子供たちのかかわり合いの豊かさに寄与していると考える。今後，「なかま」での実践での成果及び課

題等を集約しながら継続して取り組んでいきたい。

各学部での実践研究のまとめについては，前述のとおりであるが，実践研究を通してわたしたちは改めて次のことを問い直すことができた。

それは，まずかかわり合いの豊かな子供を育てていくための教師のかかわり方の大切さである。それぞれの学部で，教師のかかわり方へのアプローチの仕方の違いはあれ，教師の存在というものが改めて浮き彫りになったし，わたしたち教師自身のかかわり方が改善されていった。子供たちは，教師のかかわり方が改善されるにつれて，自分から教師に自分の意図や気持ち等を伝えたり，周りの子供たちへのより良いかかわり方を身に付けていったりした。今後も，絶えず教師のかかわり方を問い直しながら，教師自身が自らを高めていくように努力していきたい。

また，それとともに，学習活動の設定や教材・教具の提示の在り方などが大切になってくることが分かった。各学部それぞれの視点に沿って探ってきたわけであるが，わたしたちは常に子供の能力や特性，対他者との関係など子供のことを念頭に置きながら学習活動の設定や教材・教具の提示の在り方などを考えていくことが大切である。換言して言うならば，教師からの一方的なものでなく子供の側から常に出発しているのだということを改めて問い直すことができた。そして，わたしたちが，子供一人一人に応じて学習活動を設定したり教材・教具を提示したりすることによって，子供たちは自ら積極的に学習に取り組んだり，学習への取り組み方に気付いていったりした。

このように，４年間の研究を振り返るとき，自我に目を向けながら教育課程編成の留意点を導き出し指導計画を作成したこと，かかわり合いの豊かな子供を育てるための指導方法を探りながら実践を進めてきたことは意味があったと考える。また，前述した学習場面や休み時間での様子を見ても，子供たちのかかわり合いは豊かになりつつあり，わたしたちが目指す子供像に向かいつつあると考える。ただ，一方において自我に関する研究は，図りしれず奥深い面があり，自我に関することを十分に深めることができたか，またかかわり合いの豊かな子供を評価するに当たって自我に関する研究を十分に生かせたかというと課題が残った面がある。今後も実践を通す中での検証をしていくことが必要になってくると考える。

本研究においては，冒頭に述べたように指導計画の作成及び実践研究を平行させながら進めてきた。指導計画の作成と実践研究という両輪をうまく関連させながら研究を進めることができたか，また４年間の中でじっくり腰を据えて取り組めたかというと疑問が残る面はあったように感じる。ただ，本研究を通して教育課程の編成を一応終えることはできた。それが，大きな成果と言えるだろう。いずれにしろ，今後実践研究を更に深めるとともに教育課程をより良いものにしていく必要性がある。研究は絶えず続いていくが，その過程においては子供との“かかわり合い”を大切にしながら，子供も教師もお互いに一人間として成長，発達していけるように願っている。